

〔研究ノート〕

「犠牲」の倫理的意義を考える

田中範孝（倫理研究所研究員）

はじめに

事を成し遂げるとき、あるいは危難を脱するとき、その決め手となるのが献身的な人（や物）の働きである。あの 3・11 の大震災で見せた消防隊や自衛隊の命がけの救済活動、子どもの成長を支える母親の献身的な養育、また可愛がっていた動物や大切にしていた機械や道具によって窮地を脱する例など、そこにあるのは他の誰かのために身を挺する人や物の「犠牲」の存在である。それは一面から見ればまことに美しい行為である。

倫理研究所の創設者である丸山敏雄によれば、人類の歴史は、人身御供伝説や人柱伝説など、「犠牲賛美の歴史」でもあった。また、愛児を喪った母親に対して「おさんは家庭の尊い人柱になられたのです」と、その死の意味を「犠牲」の観点から懇々と諭している例もある。

あるものを活かすために別のあるものを代償として払うというのは、理屈としては頷けようが、別の一面から見ればきわめて冷徹で酷薄な原理ともいえる。「犠牲」という言葉自体も、「いけにえ」という、どちらかといえば負のイメージを連想させるものがあり、悲しく暗い印象さえつきまとうのだが、はたしてそれはそれほど悲しく暗いものなのか。宇宙原理としてみたとき、なぜ「犠牲」は必要とされるのだろうか。そしてそれはただ一方に苦痛や悲しみを強いるだけのものなのか。もしそうなら、誰もができることでもなさそうだが、はたしてこれは特殊なことなのかどうか　と、疑問は尽きない。

以下、本稿では、これらの疑問点を踏まえながら、『倫理』（第 716 号）に「丸山敏雄の『犠牲の倫理』の一考察」として述べた内容を再度採り上げつつ、「犠牲」の倫理的意義についてアプローチしてみたい。